

## 相模原市域の農業

——その変遷過程における地理学的考察——

折 山 由美子

農業内外のインパクトを最も受けた、大都市周辺の相模原市を、本研究の対象地域とした。相模原市の農業は都市化に押され、衰退は著しいが、まだ地域的に特徴を有して残っている。そこで、現在に至るまでの過程とその要因を、自然条件及び集落の変遷から明確にすることを研究の目的とした。

相模原市は、三段の河成段丘である洪積世の相模原台地上にあり、地下水位面は深く、水系的に分離孤立している。その為、江戸時代には、集落は境川及び段丘崖・小河川に沿った地域にあっただけで、新田開発も殆どなされず、多くは山林原野又は自給肥料採草地の<sup>まぐさば</sup>秣場であった。また、台地上は厚くローム層に被われて地味が悪いので、土地生産性は低く、芋類以外の作物には適していない。

しかし、明治時代に、農民はこの様な状況の中で、養蚕に活路を見いだしている。消費地の横浜港や、地方機械業の中心の八王子を背景に、この地域の養蚕業は発展していった。これと同時に、農民の長年の開田要求が、開田計画として相模川総合水利計画に含まれて成立。だが、日本と世界の関係が緊迫する中で、軍備増強の必要上、広大で平坦な地形で日本の中心に近いこの地に、軍都化が進められた。よって、開田計画は一時中止されている。軍都化は、開田予定地及び耕地を潰しただけではなく、軍施設での雇用の場を与え、早くも兼業化・脱農化を当市にもたらした。

戦後の開拓と共に、占領軍の政策で、開田計画を畑地灌漑事業に変えて実施したが、成果をあげずに終わっている。それは、京浜に接している相模原市が、高度経済成長期の昭和30年に、工場誘致条例を制定して工業化をはかり、急激な人口増加現象を生み、農地転用を促進した結果の為である。

こうして、相模原市は衛星都市に成長し、市の

東部は工業団地化やデベロッパーによる宅地化が進み、現在は西部にまとまった農地を残すのみで、経営規模の両分化が激しい。その西部の大沢・田名・上溝・麻溝の今日の農業は、露地野菜栽培が中心で、その他は養蚕と畜産が特徴に挙げられる。養蚕は、かつては畑作や畜産との複合経営だったが、機械化、施設の近代化、飼育技術の進歩で、年掃立回数も増え、収入も安定し、専業経営化している。畜産は、粗放的農業に適する土地条件と大消費地を控えて発展した農業部門である。最近では、畜産農家の企業化が進み、資本集約型の農業の大規模経営が目立つ。特に、この養蚕と畜産は、昭和37年の農業構造改善事業の基幹作目として指定を受けたことが、経営の規模拡大と安定につながっている。

大沢は八王子に最も近い事を利用して、新鮮な野菜供給地として、根菜類中心の露地野菜栽培地域である。火山灰土壌は良質な大根を作り、“上大島大根”として市場性が高い。また、相模原市の場合は大企業の進出で工業集積が起り、貸倉庫、貸工場を営む、土地利用型の農業が見られる。大沢は周囲が工業地域なので、この経営が特に多い。

田名は、田名工業団地の造成の影響は北部で受けたが、中央の住宅地域では集約的農業が営まれている。南部は、耕作放棄地が目立っている。

上溝は西部の中心である。だから、西部では最も都市化が激しい地区で、農家率は低く、農家の階層の両分化が著しい。そして、養豚の企業経営の中心でもある。

麻溝は、上溝とは対照的に、最も都市化の少ない地区である。戦後の開拓団の挙家離農で麻溝台に養鶏台地が形成され、県内一の規模を誇る相模原市の養鶏の中心地域となっている。相模川の沖積面上宿・下宿では梨を導入し、国道129号線の沿道で直売方式の果樹栽培を成功させている。

こうした実態で、今後は農住混在地区での生産拡大は困難となり、企業経営の畜産などは郊外へ移転している。全体的には、土地管理型の非農業

志向が強まり、農地はさらに減少し、荒廃地化・家庭菜園化が進むことが予測される。

## 筑波山における地質・地形と風化生成物の関係

加 野 律 子

地表を覆う物質としての風化生成物について、地質・地形との関係から考察するのが本研究の目的である。研究の対象となった筑波山は、花コウ岩と斑レイ岩の二種類の深成岩類からなり、急な傾斜をもつ山頂部に斑レイ岩が露出している。この斑レイ岩は二種に大別され、女体峰付近にはカンラン石ハシレイ岩が、男体峰付近にはシソキ石斑レイ岩が分布する。花コウ岩は山麓の一部に露出するが、残る山体の大部分には岩屑が堆積する。

現地調査と脱鉄処理をした試料の検鏡から判明したことを以下にまとめる。

1. 山体の南斜面では風化生成物と地質の対応がよい。女体峰付近の風化生成物にはキ石が少なく、男体峰付近にはキ石に富むものがみられる。中腹の筑波山神社周辺の風化生成物是有色鉱物が非常に少なく、花コウ岩が母材であった。山麓の風化生成物は山頂付近ほど有色鉱物が多くないが、花コウ岩の風化生成物よりは多く、花コウ岩と斑レイ岩の両者を母材とする風化生成物が堆積していた。山麓にこのような風化生成物がみられるのは、緩傾斜のために、山頂からの斑レイ岩の岩屑が堆積しやすかったためであろう。
2. 山体のところどころに鹿沼パミスをはさむ火山灰層が堆積する。これらは有色鉱物が非常に少なく、粒径が0.01以下のものが多い。深成岩類を

母材とする風化生成物よりも粘土化が進んでおらず、風化作用を受けた時間が短いと考えられる。

3. 花コウ岩の風化生成物の層は、下部がクサレ礫、その上が明褐～赤褐色の砂礫～砂質粘土層、表層が暗褐色の粘土層と3層に区分できるが、斑レイ岩ではこのような区分はない。斑レイ岩の層は全体が粘土質で、下部には50～70cmの亜角礫をはさみ、地表に近づくにつれ礫が小さくなる傾向があった。この地層の違いは花コウ岩と斑レイ岩の風化の過程の違いを反映したものである。すなわち、花コウ岩は風化の過程で粒状分解するのに対し、斑レイ岩は礫の表面から粘土化が進むことが原因であろう。

4. 風化度は長石の風化生成物の凝集体から知ることができるようである。風化が進むほどこの凝集体を構成する長石の粒が小さくなり褐色を帯びてくる。凝集体がみられないのは花コウ岩のクサレ礫や火山灰の大部分で、凝集体が多いのは表土であった。とくに、山頂付近の斑レイ岩を母材とするものは、長石が単体として存在せず、濃い褐色を呈していた。

この研究では、微地形と風化生成物との関係を詳しく調査できなかったが、斜面上の風化生成物を考える場合、地形との関係を見逃すことはできない。これは今後の課題である。